かながわの民俗芸能

第 61 号

小坪須賀神社／葉山森山神社、三十三年大祭行合祭り
（平成８年９月14日、葉山一色海岸及び森山神社）

神奈川県民俗芸能保存協会

目　次

国指定重要無形民俗文化財「貴船神社の船祭り」について　後藤　淑　……3
かながわの民俗芸能散歩（1）三浦市①
海南神社の「面神楽」　田中　勉　……5
『川崎山王祭りの宮座式』映像記録作成にあたって　杉崎真澄　……7
会員だより
山北のお峯入り――第16回目の公演　岩本喜明　……9
三浦黄金伝説――葉山神婚祭で見た夢――　徳山泰子　……11
後継者育成事業研修会
「民俗芸能の継承と発展――後継者育成と学校教育」（懇談会）に参加して　城所恵子　……13
ニュース・伝言板　……16

国指定重要無形民俗文化財

「貴船神社の船祭り」について

神奈川県民俗芸能保存協会会長・昭和女子大学教授　後藤　淑

（一）

神奈川県足柄下郡真鶴町貴船神社の船祭りが平成八年度無形民俗文化財として国の指定を受けた。真鶴町貴船神社の氏子たちが長い間継承して来た祭りが県、町の文化財というだけでなく国の文化財として特別価値高いものと認められたわけである。

国の宝である文化財をそのまゝの形で末長く伝えるとともに、こうした日本の伝統文化を、新しい文化を創造する素材としたいものである。

貴船神社の船祭りが国指定となったので、何か書いてほしいとのことであった。貴船神社の船祭りを後世に伝えて行くために、この祭りの文化財としての価値をこの機会に改めて再確認しておくことも必要であろうと思い筆をとった。

貴船神社の船祭りのことは、すでに多くの書物・雑誌に紹介されており、今更改めて書きとめる必要もなかろうと思う。そこで、ここでは永田衛吉氏『神奈川県民俗芸能誌』など今まで報告された書物と以前に見学した私のメモ、今回の国指定の指定理由書を参考に概要を紹介し、それによって貴船祭りの価値について思いよりを書いておくこととする。

（二）

船祭りは全国に多い。その形式も多様である。本社から神を迎え、それを御座船に迎えて海上を巡幸し、御旅所（仮宮）に神を迎え、そこで祭りを行ない還御するのが船祭りの基本である。その祭りにあたって、祭り執行の中でどこに中心をおいて祭りを盛りあげているかによって、祭りの様相も変ってくる。港内巡遊を中心にすると、祭りの様子も海上の行事が華やかになって様子が変るし、その海上巡遊も供奉船を飾りたて御座船と見紛うようにすると様子も変って来る。また、いろいろな理由があって、本来海上で行なうべきものを船形の山車を作り、陸上を巡幸するという形をとると様子が変る。祭りを盛りたてるための芸能をきわだたせると見る目の祭りの様子も変ってこよう。貴船神社の祭りはどのような形式の祭りであろうか。

貴船神社の船祭りは今日七月二十七日、二十八日に行なわれている。貴船神社はもと貴宮（きのみや）神社と呼ばれており、漂着神の伝説と関係のある神社といわれている。海辺であったので神社名を宮から船にかえたのだという。或いは祭神が船に乗って来たというところから神社名を船に変えたという考えがどこかにあったのかも知れない。貴船神社宮司平井家の先祖がこの海辺に流れ着いた木像を拾いあげ祭ったのにはじまるといわれる。神社の御神体が海から流れ着いたという伝承を持つ神社は全国に多い。貴船神社もその種のものであろう。

七月二十七日朝、仮宮前の浜に小早船（こはやふね）と呼ぶ二艘の船が置かれる。此の船は花飾り、吹き流し、幡幕で飾った華やかな船である。小早船というのは御座船（供奉船ともいう）のことである。小早というのは駿足の意味という。小早船に一艘の神輿船がつく。小早船、神輿を曳く櫂伝馬（かいてんま）が二艘つく。これらの船の他に二艘の囃子船（六艘であるともいう）が加わる。これらの船の一団が海上を渡り、神社へ神迎えに向うのである。

神社では神事が厳かに行なわれ、神社前では鹿島（かしま）踊りが踊られる。神事が終り御神体が神輿船に移され、神職・氏子惣代などが船に乗る。こうして華やかな船の一団が仮殿へ向かって海上を巡行する。小早船では古い船歌がうたわれる。二艘の囃子船から笛・太鼓の囃子が奏され、歌・音楽にのって船は港内を巡る。

海上巡行が終り、仮殿に着くと、神輿は仮殿に移される。そこで鹿島踊りが踊られる。仮殿での宵宮の神事が終ると、花山車（はなだし）と呼ばれる一種の万燈を青年たちが振り町内を巡り祭りを盛りたてる。

翌二十八日には神輿が町内を巡行し、花山車が町内を巡る。晩景になり神輿は仮殿から神輿船に乗せられ、小早船を伴い還行する。小早船には提灯がともされ、一大絵巻を展開する。神社では鹿島踊が踊られ、二日間にわたる船祭りは終る。

この祭りでは小早船の飾が目をひく。小早船は御座船形式の供奉船で屋形組立風である。長さ約十二・三メートル、間口約一・八メートル、奥行約七・二メートル、高さ約一・八メートルで、その周囲を花鳥・鳳龍の彫刻で飾る。屋形の前後の入口は破風作りで御簾をおろす。左右に幡幕を張り、その上に吹き流しをつけ、船名を書いた旗、薙刀・大鳥毛・槍・提灯をつける。屋形の上にサイコロ・将棋の駒をつけた造花幣をつける。

小早船は一艘を東明丸といい、一艘を貴宮丸という。東明丸は真鶴東区から出し、吹き流、旗などを白色で統一し、貴宮丸は西区から出し、赤色で統一した。船首には水先案内人と思える長老が陣笠、裃姿で座す。船尾には船頭、水夫らが座す。

屋形には「歌之助」「歌上げ」という役の者が乗り、巡遊中、常に船歌を歌う。船歌は「黄帝」「四季の歌」などという古い歌で、そのリズムには古調があって祭りの古さを思わせる。

櫂伝馬（櫂で漕ぐ）は石材運送を職とする人達によって漕がれるという。櫂伝馬船は小早船よりやや小さい。船先には角樽・棕梠（しゅろ）・五色布をおく。鹿島踊りはもと漁業にたずさわる村の人達によって踊られたが、今日では太鼓・鉦・日月などの役以外は中学生が演じているという。町内を練る花山車は一種の万燈で、その万燈は造花で飾り、それを振りまわす。万燈は重いので若者がこれに従うが、その若者は石材にたずさわる人という。

（三）

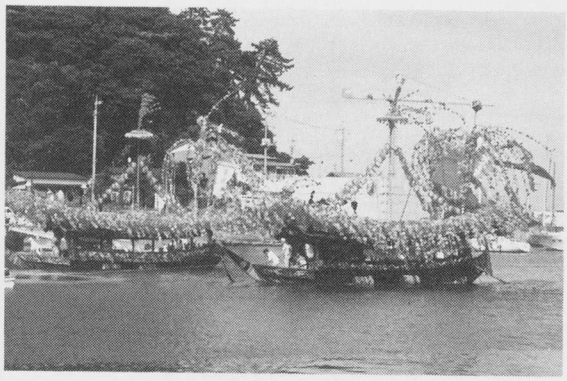
以上、概略したように、貴船神社の船祭りは真鶴の人々が豊漁を祈り、海上の安全を祈って古くから行なわれて来たものである。神を神輿に移し、本社から御旅所に迎え、町内を巡行し、御旅所の祭りを終って本社に還御する祭りだが、その巡行が海上で盛大に行なわれるところに特色がある。海上の巡行は当然船が使用される。それぞれ船の役割があり、船を豪華に飾るが、その飾りに古い時代の人々の生活表現があり、特色がある。

神は祭りの時、海や天から降臨すると考えられているが、貴船神社の神は海から降臨したとされている。真鶴の貴船神社が海辺にあり、漁業に従事する人々が多いところから海上での巡行が盛大に行なわれることになった。

貴船神社の船祭りは日本の船祭りの中でも典型的な船祭りの一つであって貴重であることは勿論だが、この祭りにともなって行なわれる芸能にも注目すべきものがあって、価値ある存在となっている。

海上巡遊の時に歌われる船歌は古い歌詞と古い調子の音律で祭りの資料的価値をたかめている。また、行事進行の途中、各所で踊られる鹿島踊りも注目される。鹿島踊りは茨城県の鹿島神宮の神意を伝えた鹿島事触（かしまのことぶ）れに発したといわれる。鹿島踊りは神奈川・東京・静岡などに伝わっている風流（ふりゅう）踊りの一種である。神奈川・東京・静岡地方に残る鹿島踊りはすべて同じではなく、それぞれ地域的特色があり注目される。貴船神社の船祭りに踊られる鹿島踊りは他の地域の鹿島踊りと比べると共通するところもあると同時に違っているところも多い。神輿の町内巡行の時、青年たちの振る万燈はこの祭りを盛りたてている。

貴船祭りを総合的に見ると、祭り全体がバラエティーに富んでおり、各所に古い面影を残している。国は貴船神社船祭りの文化財指定理由として、日本各地に伝わる船祭りの中で関東地方に残る典型的なものと位置づけ、日本人の基盤的な生活文化の特色を示すものという指定基準にそったものとしている。



小早船

櫂伝馬と小早船

かながわの民俗芸能散歩（1）

三浦市① 海南神社の「面神楽」

三浦市教育委員会社会教育課　田中　勉

三浦市三崎の海南神社に伝承されている「面神楽」は、毎年十一月初めの申酉の両日、境内の神楽殿で奉納されます。

面神楽は、日本の神話を演じる仮面黙劇で、関東では神代神楽、里神楽ともいわれ、三崎では面を被って踊るところから、こう呼ばれているようです。

海南神社は、かって三浦の総社であった神社で、伝えられる郷土芸能も、一月のチャッキラコ、二月の稲荷講（いなりっこ）、七月の夏祭の「行道（お練り）獅子」があり、三浦を代表する神社といえます。

面神楽の沿革についてはその詳細を示す資料がなく、いつ頃から行われているのか詳らかでないが、古老の覚え書きや宝暦年間に書かれた『三崎志』、あるいは『新編相模国風土記稿』『三崎郷土史考』などの記事から推察すると、江戸時代の初期から中期にかけて、江戸経済の発達に伴い、江戸の商人と三崎とのつながりが発展することにより、海南神社への献灯等の寄進や社殿の改築がおこなわれており、そのような時代を背景として、大漁祈願に奉納された神楽が神官から氏子に教えられ、それが現在まで受け継がれたのではないかと考えられます。

面神楽の演じられる前日に行われる「出居戸（でっと）の神楽」は、海南神社の祭神、藤原資盈（すけみつ）・盈渡姫（みつわたひめ）が三崎へ漂着した日（十一月一日、未の日）の縁起によるもので、湯立神楽が行われます。神社では大釜にたぎらせた湯を笹に浸して祭神にささげ、集まった人びとに湯をふりかける清めの行事と、氏子総代により、餅あられがまかれる行事があります。これも、資盈漂着の時、霰が降ったという伝承によるものです。

また、その日氏子の家に忌穢のある者は、この神楽の終わるまで海浜の「忌崎（いみざき）」とよばれる場所ですごし、忌を避けるようにしていた、これを「出居戸」ということから、「出居戸の神楽」の名がつきました。

そして、その翌日申の日と翌々日の酉の日の夜、面神楽が奉納されます。

現在まで伝えられているのは、昔話を含めて二十二演目、神楽面は五十六個が数えられます。楽器は笛、締太鼓、大太鼓、鉦をつかいます。

各演目の時間と出演人数は、

国がため（20分・2人）
恵比寿の舞（90分・9人）
湯立（60分・9人）
千鳥（45分・9人）
三人和合（60分・3人）
三人囃子（45分・3人）
彦面（60分・3人）
羅生門（30分・4人）
大江山（90分・12人）
鵜茅草（90分・5人）
勘当場（60分・4人）
大蛇退治（60分・5人）
岩戸開き（90分・8人）
天狗の舞（30分・2人）
種まき（60分・9人）
玉取り（30分・9人）
花咲かじいさん（60分・7人）
浦島太郎（90分・20人）
桃太郎（60分・11人）

恵比寿の舞　大鯛を釣り上げた場面

岩戸開き　扇の舞

大蛇退治　酒を飲む大蛇

さるかに合戦（60分・6人）
舌切りすずめ（60分・7人）
宝剣取り（45分・9人）
獅子舞（1人）
（獅子舞は演目の合間に行う）
以上のなかから、十～十二演目が二日間で演じられますが、毎年、国固めで始まり岩戸開きで幕引きとなります。演者の数は十数人ですから、一人数役をこなすことになります。

ここで昭和六十一年発行の市政概要「みうら」に掲載された、前保存会会長の水上茂さんのインタビュー記事から、神楽の様子を引用してみます。

《スケテンテン　ドンドンドン
ドド　トコツク　トコツク
トンツクツ

大太鼓、締太鼓、笛の囃子で舞う面神楽は、境内の仮設舞台でくりひろげられる。幕開きは、鈴を手にした、「巫女舞」、次いで四方を清める「国固め」「岩戸開き」と続く。神事神楽としての伝統は、いまもきっちりとまもられている。「醜（しこ）面」「三番叟（さんばそう）」「三人和合」「舟弁慶」など、境内に夕闇迫るころから始まる面神楽は九時、十一時の夜更けまで延々。そして、二日目の酉の日も。舞の中には「花咲爺さん」「浦島太郎」「猿蟹合戦」もまじえる。なじみの狂言に、つめかけた観衆もわく。

圧巻は、「恵比寿（えびす）の舞」。海上・漁業の守護神・恵比寿が釣りあげた大鯛を小脇にかかえながら意気揚々と舞う姿に、一段と大きな拍手がわきあがる。海の神に漁の安全と大漁を願う民衆の素朴なこころを見る。

「楽屋裏の忙しさは、そりゃ大変なもんよ。素早く衣装を着替え面をつけてもらって舞台へでるんだが、神楽師仲間の総がかりでなきゃとてもできるもんでねえ」

舞台へ出る間（ま）がむずかしい。面に隠された呼吸を感じ取って姿を見せる一瞬が「舞台を決める」という。広い舞台をたった一人で十数分も舞いつづけるパントマイム。季節は霜月なのに、面の下からは汗がしたたれ落ち、汗にまみれた衣装は、晴天に二日もさらさなければならないほどだ。》

いなりっこ　道化

演目中の「恵比寿の舞」の物語は、恵比寿様が里人を集めて漁にでるので、里人（道化）が餌となるイソメを掘りに行くが、一人が目に怪我をしてしまい、急ぎ医者を呼びます。このくだりの踊りが見せ場の一つ。やがて騒動も納まり餌を掘り終え、恵比寿様より貸し与えられた釣竿で釣りをしますが一匹も釣れません。これを見ていた恵比寿様、大いに笑われ、おもむろに竿を手にして磯に立たれると、種々の魚が釣れ、最後に大鯛を釣り上げ幕となる。

この演目は、昔から不漁が続くと大漁祈願として社前で奉納されたもので「漁神楽」ともいわれ、大漁になると「礼神楽」といって「浦島太郎」が奉納されました。これは、近世以来漁業を生業の中心として発展してきた三崎ならではの行事といえます。

これらの神楽を演じているのは、職能化した神楽師ではなく、純粋に氏子たちによって伝承されているわけで、これは他にあまり例をみないことで貴重な存在となっています。

保存会の設立は、昭和四十四年の神奈川県民俗芸能保存協会の設立がきっかけとなり、関係者の間に保存会設立の機運が高まり、同年十月に海南神社面神楽保存神楽師会が誕生しました。

保存会では、後継者の育成にも力をいれています。

三崎では、かって二月の初午の日に稲荷講が各地区でおこなわれ、その主役となるのが男の子たちで、子ども版面神楽がおこなわれていました。

面神楽保存会のメンバー数人が中心となり、いなりっこ保存会を結成して、現在、子ども版面神楽の育成をおこなっています。会では二月十一日に海南神社の稲荷社で奉納、四月に「いなりっこ発表会」を青少年育成事業として青少年会館で開催しています。

このいなりっこ保存会の中から神楽師が生まれ、伝統を受け継いでいます。

『川崎山王祭りの宮座式』

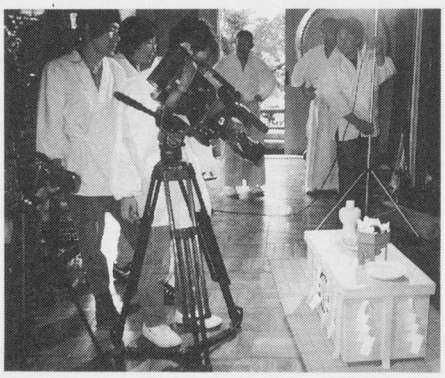
映像記録作成にあたって

川崎市教育委員会文化財課　杉崎真澄

平成八年（一九九六）五月、人事異動で教育委員会文化財課に来た私にとって、最初の大きな仕事になったのが、今回製作された映像記録『川崎山王祭りの宮座式』です。この様な無形民俗文化財の映像記録などの製作に直接携わったことがなかった私は、この話を引き継いだ時に気になったのが、（民俗文化財も含めた無形文化財全てに言えることなのですが）映像記録をふくめた形で記録・保存の方法について様々な意見があるのはもちろんのこと、これらの施策が、その無形文化財を変質させてしまったり、あるいは固定化させてしまったりする例があり、大変慎重な対応が必要となることでした。この様な映像記録の製作には、少なくとも2年は必要との話も聞いたことがあります。しかし、当日まで3カ月という中、試行錯誤の映像記録化事業は始まりました。

まず、今回の映像記録にあたっては、この事業の目的を再確認することから、始めました。実は川崎山王祭りについては、昭和五九年（一九八四）に「稲毛神社　山王まつり」という映像記録が川崎市博物館資料収集委員会によって、製作されています。今回の作品は以前の作品とは内容的に違ったものにするのはもちろんですが、前作の段階では選択無形民俗文化財に選択されておらず、神奈川県からの要望として「対象となる文化財の所作等について、最初から最後まで切目なく撮影する。」という条件があったので、宮座式の一部始終を記録するということが大前提となりました。従来の映像記録では、音楽やナレーションが入るという形式が一般的ですが、一つの事実も映像に記録され、解説や音楽など様々な演出・編集が加えられると、演出家や編集者などによって、幾つもの解釈が出来るようになることはご存じの通りです。極端な例ですが、旧ユーゴスラヴィア紛争下で同じ映像が敵味方で各々相手方の行為として報道に利用された例など枚挙に暇がありません。今回の映像記録では、複数のカメラで宮座式の一部始終を収録し、音楽・解説などは一切つけない形で出来るだけ演出などが加えられていない素材ＶＴＲを成果品の一つとし、もう一つの成果品は、一般の視聴にも活用できるように、解説ナレーションや音楽などを加え、山王祭りの中での宮座式の存在を中心にとらえた約一時間の作品としています。

拝殿内の宮座式の撮影



拝殿内での神饌の撮影

次は記録媒体です。ビデオによる収録ということ以外の細かな仕様については、決まっていませんでしたので、限られた時間ではありますが、将来のことも考えてデジタル媒体について模索してみることにしました。近年は業務用だけでなく、一般向けにもデジタルビデオカメラやＤＶＤなどのデジタル媒体が普及しはじめていますし、テレビのデジタル放送化も話題になっていますので、現在主に使用されているアナログ方式の媒体にとって代わるだろうことが容易に想定されます。デジタルＶＴＲの利点は、まずＩＣメモリーを使った複雑な合成や特殊効果を行なうことに都合が良いことがあげられます。アナログＶＴＲは、度重なる収録や再生などを繰り返すと歪みやにじみをおこすのに比べ、デジタルＶＴＲの場合はほとんどおこりません。これは伝送系にもあてはまり、外部からの雑音などの影響を受けにくいものとなっています。また、デジタル信号はコンピューターの扱う信号そのものであるため、コンピューターでの様々な活用が容易で、今日のようにパソコンが急速に普及し、インターネットなどが脚光を浴びている中、映像記録を含めた文化財の情報の活用を考えると将来のデジタル化を念頭にいれる必

要もあるように思われます。川崎市教育委員会文化財課では、今回の映像記録において、製作の一部にデジタル媒体の使用を試みることとしました。当初、デジタル媒体の利用は、撮影から編集そしてマスター・成果品までを考えていましたが、結果的には、様々な事情から、成果品の一部がデジタル媒体となった形となりました。（ちなみに今回使用したデジタル媒体はD2VTRで、既存設備との相性の良さから放送の基幹VTRとなっているものです。ただし、これがベストということではなく、今後、デジタル化も含めてこの様な映像記録の統一規格が出来れば良いと思います。）

映像記録の仕様がほぼ固まったところで、今回の映像記録の製作を委託する業者を決定しなければなりません。業者の決定には幾つかの方法がありますが、民俗文化財の映像記録は経験と知識が必要とされる業務であるため、予算を明示し、企画案を比較検討の上、もっとも優れた企画案の業者に決定するというプロポーザル方式を用いました。まず同様の映像記録の実績がある5社を選定し、平成八年（一九九六）六月一一日に説明会を開催しました。参加業者には事前に宮座式についての資料を送付しておき、当日は、今回の映像記録についての趣旨やスケジュール・進行方法・仕様・教育委員会側からの希望、そして契約書にも明記されていますが、著作権の帰属が川崎市教育委員会側にあることを伝えました。著作権については、映像記録の活用等でのちのちトラブルの元となりますので、製作する際には注意が必要です。また、当日は、撮影の中心となる稲毛神社においても市川緋佐麿宮司による説明と宮座式の場となる拝殿などの見学を行なわせていただきました。企画案の提出は約2週間後としました。

企画案は5社そろった段階で、内容的な評価をお願いした後藤淑氏（川崎市文化財審議会委員）と橋本貢三子氏（川崎市文化財調査員）に業者名が分からない形で、比較検討をお願いし、評価をまとめていただきました。その評価を元に教育委員会で仕様など総合的な検討の結果、神奈川ニュース映画協会に委託することが決まりました。

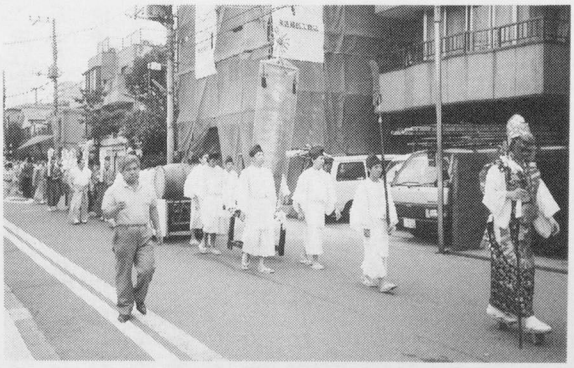
業者が決定したのは、七月も半ばに入ろうという頃でしたので、企画構成案に従って急ぎ撮影プランの検討に入りました。企画案の評価をお願いした後藤淑氏の監修・指導の下、市川緋佐麿宮司・お台所の市川秀夫氏などのお話を伺いながら撮影すべき素材・ポイントが選択されていきました。

撮影は宮座式当日の八月二日、神輿渡御・新田神社での宮座式のある三日、及び関連資料等の撮影に数日が充てられました。その後、ナレーション原稿・挿入するスーパー（字幕）などの検討を加え、一〇月末には編集録音を終え完成にいたりました。

この映像記録の公開については、平成九年（一九九七）四月一日からとし、事前に関係者向け試写会と多くの市民にこの映像記録の存在を知っていただくため、市民向けの試写会を実施することとしました。従来、市域の映像記録製作にあたって、このような試みがなされたことは無いようでしたが、公開前の三月二三日に川崎市市民ミュージアムで行なわれた市民向け試写会には小雨の中、二〇〇名近くもの来場者があり、アンケートを見るかぎりではありますが、大変好評をいただきました。

つたない文章ではありますが、以上のとおり今回の映像記録の製作にあたって、素人なりの検討と簡単な経緯を記してみました。映像記録の内容については、短い時間にもかかわらず、監修や助言をいただいた方々のお力で、充実したものとなりましたが、仕様については検討に要する知識も時間も充分ではなく、中途半端なものとなってしまったことは否めません。今後の映像記録などの参考になれば幸いです。

最後になりましたが、今回の映像記録製作に当たっては、稲毛神社山王祭り関係者の皆様をはじめ多くの方々の御協力をいただきましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



町内巡行

会員だより

山北のお峯入り――第16回目の公演

山北のお峯入り保存会会長　岩本喜明

平成8年10月13日公演の「山北のお峯入り」に当りましては、遠路はるばると、またご多忙の中を県西のはずれの地、山北迄お越し下さいまして誠にありがとうございました。

そのうえ午後には数キロにも及ぶ山路を登っていただき、氏神様である神明社での再演におつきあいくださり、ご声援を賜わりまして重ねて厚く御礼を申し上げます。

おかげを持ちまして、文久3年（1863）以来、16回めに当る今回の公演も天候にも恵まれ、計画通りに全日程を無事終了することができました。誠にありがとうございました。

◎　15年ぶりに神明社に奉納

当初の計画では、神明社での公演計画はありませんでした。

理由は二つ。その第一は「午前の公演を町中心部で行いたい。」としたことから、午後の会場（共和地区）への移動時間の確保が苦しくなってくること。第二は、演技者の高齢化で身体に異常が出た人が何人かおり、数キロの山路を重い用具を持ち、歩きにくい衣装・履物で登頂することにはかなりの無理がある、……とするところから、午後は共和小学校で行うことになっておりました。

ところが補助金を申請する段階になって「神明社での公演の再検討をぜひに……」とする宿題を頂戴しました。まことに恥かしいことですが、現実に目を奪われて15年もの間、氏神様に奉納できずにいることを重く捉えずにいたのです。

早速難問を解決するための役員会を開き、第一の「移動を短時間で行う」方策を考えました。（国道246号線の「都橋」改修工事に伴う通行規制の問題も、関係各位のご尽力でクリアできました）第二の歩行困難の件は、単車と軽自動車を動員することで乗り切ろうということで、ご高覧いただきましたように神明社での公演が実施できたわけでした。

そのような中で、記録映画をお願いした神奈川ニュース社の方から、「神明社に到る胸突き八丁とも言える部分の旧道を通って、道行きをしてもらえないか」とする話が飛び込んできました。

15年もの間、通行していない、言わば廃道を通れということですが、皆さんはその意味を理解してくださり、ぬげてしまいそうな草履や、足をとられそうな衣装に苦しみながらも道行きをやってくださいました。

登頂した時、その昔の先輩たちのありようを肌で感じとられたようで、良かった、良かった……と言ってくださいました。（当日に備えて道造りをした後、大風が吹いて木々が倒れて道をふさいでしまったのを、何人かの人が進んで除去してくださっていたことなども事後に知りました。）

公開公演で山北駅付近を練り歩く道行き

13日当日の、神明社での公演はたんたんと進行していきました。

電気がないため、マイク等も使えません。進行がスムーズに行くか？観客の皆さんに声が届くかどうか？という心配は最後まで頭を離れませんでしたが、皆さんがよく協力してくださったので、高い木立ちに囲まれ狭い境内でのいたわりあうような演技は、かえって暖かみと深みと重々しさ？……とも言える雰囲気をかもしだしていたように感じられました。

特に、観客の皆様と演技者が一体となって公演を楽しみ、和やかに終了できたことは何ともいえない心地良さを味わせてくれました。

◎　公演することこそ

民俗芸能は「公演することに意義がある」と考えております。

いかに素晴らしい記録が整備されようと、見事な映像が残されようと、それは一度の公演に優ることは難しいと思います。国技館で観戦する大相撲とテレビ観戦の違いと言っても良いでしょう。

お峯入りは、公演に莫大な経費と80人もの演技者を要し、又、演技の習得にも60回程の回数を必要としますので、公演は決して容易なことではありません。し

かし今回の公演一つみましても、数千の方々が熱い声援と激励を送ってくださっています。私どもはあらゆる努力、工夫をし、せめて「数年に一度」、できれば「定期的」に公演できるような方策を検討していきたい、実施していきたいと念願しております。

◎　今回の公演の特徴

（一）　公演の一年半ほど前の平成7年6月の役員会で、私は次のような提案をしました。

①21世紀を迎えたら、大々的な公演を行ないたい。そのつなぎとして経費をかけない方式で平成8年に公演し、技能の習得、伝承を図りたい。

②「山北のお峯入り」という以上、旧共和村の地区に捉われないで、一人でも多くの人に観てもらい、理解者の裾を広げていきたい。

③そのためには、山北町の中心部で公演し、一方、地区の方々の為には午後地区で再演する、という方式を採っていきたい。

皆さんの了解と賛成を得、更に各地区の意見もお聞きして3年ぶりの公演にむかって歩みだしました。

（二）　今回は記念冊子の作成はあきらめ、記録映画作成のみを行うことにしました。

初めての試みとして、各役柄ごとに衣装をつけ、用具を持って正面、後姿、そして足許から頭部迄を撮影し「衣装編」を作成しました。

（三）　公演を山北町の何処で行うかについては、種々意見が出ました。

雨天時のことを考え、「老人憩の家広場と中央公民館」を借用しました。

（中央公民館では、消防法の関係で、「修業踊り」の護摩の火を燃やすことができない、という難問がでましたが、うまい方法を考察、当日に備えましたがオクラ入りしました。）

◎　エピソード

（一）　演技者を初めとして、来客の方々、そして地区の皆さんに記念品を贈ろうと、「イラスト入りで、役柄・地区・氏名」を入れた手拭いを作成しました。「ノレン」にしたかったのですが、手許不如意のため諦めました。しかし三島市の業者が良心的にやってくれましたので評判もよく嬉しい悲鳴をあげるほどでした。

（二）　今回の演技者80人の平均年齢は48才でした。9才から77才の男子です。親子揃っての出演は6組12人。初出演者は11名でした。

地区外に転出等された方々が約20名（演技者）応援してくださり、ようやく80名を揃えることができました。

本来ですと万一に備え、「棒踊り」は予備1名を加え7名とし、総勢81名になるのですが、今回は薄氷を踏む思いの80名で実施せざるを得ませんでした。

（三）　「棒踊り」

棒踊りは戸数の多い深沢地区（約30戸）が担当することになっているのですが、今回はどうしても6人の若人を集めることができず、市間地区から1名の応援を頼みました。高校生の彼は8月から約60日間、毎晩学校が終ると数キロの暗い道のりを駈つけ技能を習得してくれました。

又、深沢地区では2軒が一組になって、毎晩19時から21時迄の練習に立ち合ってくださり、茶菓の接待と声援を60日間送り続けてくださいました。（これは今回に限らず公演の度に続けていてくださるのです）

取材にいらしたマスコミの方々もこれをご覧になり、異口同音に「全くたいしたことだ!!できないことだ!!……」と賛嘆してくださいました。私どももただただ頭を下げるばかりでございます。

この棒踊りの技能の伝授と習得、育成がこれまた大変です。ここのところ3名の方がずっと指導・育成に当ってくださっています。（50代・60代・70代各1名）

10代の若者でも汗をビッショリとかき、やがてはトイレにも座ることさえできなくなる、という程のキツイ練習を一緒にやっていてくださるのです。全く頭が下ります。

あの敏捷にして華麗、そして流麗ともいえる演技の習得に、このような地区の励ましと先輩の熱意が秘められてきていることをぜひ、ご理解していただきたいと思います。

◎　終りに

私どもの先祖が何故に「県下最小の村に最大の祭り」を産み、苦しみながらもこれを育て伝承し続けてきたのか？

私は、各役柄を全村に分け、父子相伝を建前に、笛・太鼓・歌を軸として、全体の協調と協力、更に一役毎の苦しい練習と技能の習得の結果の強い一体感等々が、やがて村の繁栄と安寧をもたらすことを識ってのおもんぱかりであるように思えてならないのです。

私どもは先祖のこの見事な智恵にあやかって、今後ともお峯入りの保存と伝承に尽力して参りたいと思っておりますので、末長いご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

会員だより

三浦黄金伝説

葉山神婚祭で見た夢

神奈川県民俗芸能保存協会会員　徳山泰子

平成八年九月十四日、三浦葉山にて、逗子市小坪の須賀神社と葉山町一色の森山神社が合同で行う神婚祭（行合祭）を見学させていただいた。この祭は、須賀社の祭神須佐之男命の神輿が、三十三年目毎にその妃神奇稲田姫命の坐す森山社を訪れ、「夫婦水入らず」の一時を過ごすという、奇祭と言うにはあまりにもほほえましい、まさに実りの秋にふさわしい祭である。

須賀社の神輿の継承の場である一色海岸を、側の丘の上から眺めながら、私はしきりと、参加者の白衣の背に染め出された胡瓜紋が気になっていた。これは須賀社の紋だそうだが、京都の八坂神社にもこれと同じものがあり、キュウリに関する禁忌がある事も似通っている（こちらではその切り方に気を遣い、あちらはたしか祭の期間中はこれを口にしないと聞いた）。八坂神社も須佐之男命を祀るが、疫神である午頭天王の垂迹として、しかも奇稲田姫命とペアで祀っている。須賀社の近くにも小坂天王社なる社があり、こちらも午頭天王—疫神との関わりを示している。更に調べてみると、奇稲田姫命を祀る森山社の末社にも疱瘡神を祀るものがかつてあったらしい（新編相模国風土記）。となるとこの祭は、大荒神須佐之男命が毒をもって毒を制する、疫神退散の祭らしい。神輿が海辺を通るのは、かつて御霊会などで儀礼後神輿を海へ流した禊祓の形を伝えるものなのであろうか。その昔、須賀森山両社の神輿が相逢って行われていた海辺での秘儀の内容を、是非知りたいものである。

更に須佐之男命は暴風神でもある。夏から秋にかけては疫病と台風の季節であり、殊にこの三浦半島は暴風雨にみまわれやすいので、実りの秋にあたって、この祭を行ったのではなかろうか。

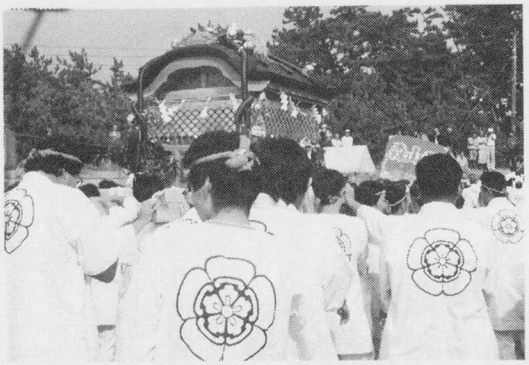
尚、位置的な事を言えば、須賀社のある小坪は鎌倉との「境界」にあたるため、岐神・塞神としての威力も期待して、須佐之男命をここに祀ったのかもしれない。森山社の方も、近くの玉蔵院の守護神として置かれたというから、こちらも後戸の神であったろう。

しかし、私は須賀・森山両社には、更なる神格があるのではないか——鉄神なのではなかろうかと考えた。まず社名の「須賀」—スカとは「洲処（すか）」即ち産鉄場をあらわす、特に砂鉄に縁ある語として、全国に分布しているものであり、また近くに、同じく砂鉄を意味する語である「ササ」の付く「笹倉」（私はバス停名として記憶している）という地名もある。そもそも須佐之男命と奇（櫛）稲田姫命の神話の本場島根県出雲地方は砂鉄の一大産出地であり、そこに繰り広げられるこの二神の出会いのドラマは、砂鉄採取の神話化とされる。出雲地方と三浦半島の地質は非常によく似ており、共に第三紀の沖積層（川が運んできた礫、砂、粘土等が一万年かけて堆積してできた）で河川域や海岸部に砂鉄鉱床を形成し、これがたたら製鉄の原料となった。つまり、出雲平野を流れる斐伊川（八岐大蛇）の、砂鉄採取（須佐之男命）のための掘削による氾濫洪水を、土木工事（櫛—杭）と水田（稲田）作りで防御した、というのが先の神話の寓意らしい。

三浦半島においては、横須賀市鴨居のたたら浜、更に隣になるが鎌倉市の由比ヶ浜（「笹目町」との地名がある）等が良質の海砂鉄の産地として知られてきた。特に鴨居は古くから相模の鋳物師の本拠地の一つとして、鎌倉幕府の支えであった。三浦大介義明は、ここに四男の義春を派遣し、以来その一族は代々多々良（たたら）姓を名のっている。

一色海岸とて、「たたら」の名こそ持たないが、これを挟む森戸川、下山川流域は出雲平野と同じく沖積平野であり、水田として利用されていたというのだから、須佐之男命と奇稲田姫命とが出会うこの浜に、砂鉄を夢みたくなる。

森山神社も、この奇稲田姫命の他、更に住吉神社の祭神底筒男之命・中筒男之命



神輿の渡御、海岸から森山神社へ

葉山一色海岸での儀式

命・表箇男之命、浅間神社の木之花佐久夜姫命、金刀比羅社の金山彦命など、金属や鉱山（火山）に関わり深い神々を境内社として祀っている。

また、この社を勧請した良弁僧正なる人物は、奈良東大寺の大仏の造像に携わり、自身百済系渡来人、つまり渡来系技術者の後裔で、その法力をもって、大仏鋳造に必要な黄金の鉱脈を奥州に現出せしめた、との伝説の持ち主である。恐らく、当時の仏教隆盛に伴うゴールドラッシュにおいて、良弁は調査隊長的存在だったのではなかろうか。彼らの布教活動は、同時に鉱脈探査・鉱山開発でもあったのだろう。また、良弁は修験者でもあるが、修験道の骨子である道教や密教はそれ即ち練金術であり、何より山野を跳梁するその生活から、山の資源には通じていたはずである。良弁開山でその生地かともいわれている大山は、修験道場であると共に古代の鉱山地帯であった。この森山社及び玉蔵院も、もとは裏の三ヶ岡の山上にあったが、この山も「大峰山」と別称されるごとく、修験の山であった。修験の山は即ち鉱山。そしてそれらの鉱山の経営管理を、当時はその山の社寺が行っていたのである。砂鉄のとれる（かもしれない）浜を背に、修験の山を眼前にして、しかも黄金伝説の主人公を開祖にもつこの森（守）山明神社が、この辺り一帯の鉱山開発の拠点であったとは考えられないであろうか。

この辺りに鉱脈の存在した事実をにおわせるものが他にもっとないか、観光ガイド等を手がかりに葉山～逗子界隈の史跡伝説をたずねてみた。その結果目に付いたのは、井戸と御霊、そして旅の高僧の足跡である。

まず葉山の三ヶ岡（大峰山）山麓、バス停三ケ岡前の富士フィルム寮内にある「石芋井戸」。*昔この井戸で近くの女性が芋を洗っている所へ空腹の賤しい旅の僧（弘法大師とも日蓮ともいう）が通りかかり、その芋を乞うた。しかし女が与えようとしなかったため、その報いで芋は石の様に固くなり、食べることができなくなってしまい、この井戸の近くに捨てられた、との物語が伝えられている。*ここでの芋は即ち鋳物（師）であり（柳田国男）、鉱脈と同じ様に水脈探査にも長けていた採鉱冶金の徒が、鉱山技術を応用して井戸堀り（土木技術）、更にその際の石積み石囲い（石工技術）にも活躍したかつての金工史の寓話化であり、この地における金工の活動を跡づけるものであろう。彼らの多くは鉱脈を求めての、ここに描かれる弘法大師の如き漂泊の徒であり、全国各地に大師伝説（弘法清水伝説）を広めたのも彼らであった。

弘法大師がかかる伝承の主人公に選ばれたのは無論、大師自身密教の大成者にして修験者でもあり、当然水脈鉱脈の透視をほしいままにする能力技術の持ち主であったためである。高僧と井戸との伝説は、この他に同じ葉山の木古庭の「高祖井戸」（日蓮上人）、横須賀市の衣笠城址の「不動の井」（行基）等がある。尚、高祖井戸の近くには、行脚中足をいためた行基（足の不具は鍛冶神の特徴の一つ）の祈誓によって湧き出したという現阿部倉温泉の前身諏訪の湯があり、鉱脈の存在を期待させる。

井戸はまた、御霊とも関わる。こちらは金工の精神史・信仰面にふれる。彼ら山野河海の技術者は、同時に呪術者でもあり、諸神地霊怨霊（勿論疫神も）の鎮魂に携わっていた。あらゆる荒神の中でも、鍛冶に不可欠の火や水をもたらすところから特に雷神が彼ら金工の信仰を集め、同じく荒魂である御霊はこの雷神ととかく同一視され、金工にとって仕事の現場であり祭祀空間でもある水辺――井戸とともに祀られた。

葉山の長柄にある長運寺及び御霊神社は、三浦党の家人長柄太郎義景が、三浦党の祖霊社建立を志した主君三浦大介義明の命により、自身の祖父鎌倉権五郎景政（柳田国男は五郎とは即ち御霊の事であると述べている）を祀ったもので、景政は戦の折弓矢で右眼を射られたと伝えられるが、隻（独）眼は隻脚とともに鍛冶神の最も顕著な特徴であり、また矢は落雷の電光即ち神の降臨の象徴として神聖視されてきたものであって、これらの諸条件（聖痕）を一身に担う景政は、近くに井戸こそ見当たらないが、まさに金工の崇め奉る御霊神の代表格である。

井戸と御霊が一体化したものとしては、逗子市小坪飯島の「矢の根井戸」がある。*保元の乱で平家方に敗れ、伊豆大島に流された弓矢の名手鎮西八郎源為朝（頼朝の叔父）が、配所のつれづれに自らの腕

を試さんと、大島から鎌倉めがけて矢を放ったところ、この井戸に落ちた。村人がこの矢を拾い上げるとヤジリだけが底に刺さって残っており、更にヤジリも拾い上げると、忽ち井戸の水は枯れてしまった。そこでヤジリを再び井戸へ戻すと、再び水が湧き出し、かくて「矢の根井戸」の名が付いたという。* この井戸は鎌倉十井の一つで正式には「六角井戸」といい、その名の如く井戸枠が六角に石積みされている。私は資料の写真でしか見る事が出来なかったが、朽ちかけてはいるが整然とした石組みが美しく、優れた石工技術を感じる事が出来た。それにしても、井戸水の増減にヤジリが関わるというのは面白い。水位を調節する技術もしくは呪術をあらわすものなのか。いずれにせよ、御霊の依代たる矢を頂き、地を穿ち井戸を組み立てる技を担う人々が、この辺りの水利を司っていたということなのであろう。

神輿渡御、森山神社境内

三浦半島は古来雨量が少ないそうなので、水の獲得は切実な問題であったにちがいない。この矢の根井戸で正月行われる鉄のヤジリ供養「井戸がい」の神事などは、一種の雨乞いであったかもしれない。「鎌倉十井」なるものの存在からも、井戸（水）への愛着がうかがわれるが、同時に、雨に恵まれないかわりに地下水は豊富であることをも示している。鉱脈と水脈に恵まれたこの地で金工達は大いに重宝がられ、また彼らも大いにその腕をふるえたことであろう。

ところでふと気付いたのだが、ここで「御霊」と呼ばれているもの達は、この土地の人々にとっては「祖霊」なのである。里にあっては井のもとに立ちあらわれる御霊神、浜に降りては疫神ともなる大荒神と、その姿は様々だが、その本質はいずれも、水脈鉱脈を辿って遡れば、それらの発する聖なる山におわします先祖の霊――水も砂鉄も黄金も、これら全て御祖の恵みなのである。鍛冶神伝承や金工史に関わり深い修験道の根底にあるのが、日本の精神史を貫く祖先崇拝の信仰であり思想であることを思えば、金属のフォークロアをアニミズムだけでなく祖霊信仰の次元においてもとらえ考えることは、あながち的はずれではない――むしろ大事な事なのではないだろうか。

それにしても、今回の見学を含めて、実はまだ二度しか訪れた事のない葉山――三浦半島を、その殆どを文献資料からのみ探ろうとするのはやはり無理があるし、何よりもどかしい。この謎と魅力に富んだ黄金郷を、改めてこれから何度でも訪ねてみたい。

（一九九六年十月）

参考文献（引用）

＊―＊『三浦半島の史跡と伝説』松浦豊著（写真で綴る文化シリーズ神奈川4 暁印書館）

後継者育成事業研修会

「民俗芸能の継承と発展――後継者育成と学校教育」

（懇談会）に参加して

神奈川県文化財保護審議会委員　城所恵子

平成九年一月十五日、三浦市三崎の「チャッキラコ」見学会ののち、海南神社社務所をお借りして後継者育成事業研修会として「民俗芸能の継承と発展――後継者育成と学校教育」のテーマで懇談会を開きました。参加者は34名でした。

この日見学した「チャッキラコ」は、前号で取り上げた東部地区文化振興会議の第二分科会パネルディスカッション（伝統文化）「身近な文化財を生かした文化の町づくり」～地域社会と民俗芸能～の中で、学校を含めた地域と保存会の連携がうまくいっている例で紹介されており、これらの評価も含め、昨年度神奈川県文化賞につながっています。

今回は、民俗芸能に携わる人たちが苦労する後継者の育成、特にこれからの後継者候補を抱える学校との連携にポイントを置き、現在どのような取り組みが行われているのか、またどのような可能性が残されているのか、懇談会という形で意見交換を行いました。

参加者には、学校との連携を現在行っている当協会の中から三団体及び関連している二高校の先生方を特にお招きしてお話を伺いました。

ここでは、さらにいくつかの事例を加えてその時の懇談会の模様をご紹介します。

◎学校との連携の実例

まず、参加していただいた保存団体から実際にどのような形で学校と関わっているのかを伺いました。

ちゃっきらこ保存会では、踊り手が幼稚園児ぐらいから小学校卒業までと限られているところから、学校で卒業時に全校児童の前で表彰してもらうようにして学校側でも評価するという協力体制をつくっています。

相模人形芝居のあつぎひがし座では、厚木東高校の人形浄瑠璃部の卒業生が座を構成しているところから学校との関係も緊密で、部活動を経験した卒業生の中から入座し、後継者となってくれるとのことです。

海南神社境内でのチャッキラコ

また、相模人形芝居の下中座は、二宮高校の相模人形部を指導するという形でかかわっており、部活動経験者が入座するということがある一方、下中座自体が後継者育成事業として相模人形教室を開き在校生も含めた一般に門戸を開いて後継者を確保するという形を取っています。

県外の事例をいくつかご紹介しましょう。国の記録すべき無形民俗文化財に選定されている山口県周防三作神楽では、地域の子供たちの通う小学校と子供会に保存会のリーダー格のメンバーが出向いて舞と囃子の指導に当たっています。

日本の民俗芸能の多くは囃したてられて舞うという音楽と舞の関係にあるので、舞う人も囃す人もその両方を会得しなければならないのです。特に笛は音が出るようになるまでに時間がかかります。そこで最近では、上達する前に投げ出してしまわぬように、音が出し易く、教育用楽器として授業で使われているリコーダーの後ろ孔と前面の孔一つを塞ぎ、節を覚えることに重点をおいて指導しているそうです。これまでは先輩の指の動きを真似て習得していましたが、楽譜を使っての指導になったので、教師の協力を得ているという話でした。

小・中学校を利用しての後継者育成ではこの例のようにクラブ活動などに保存会の指導者を招いて習得する方法が多くとられています。

高校では相模人形芝居のように選択科目や部活動に取り入れている場合が多いようです。日本民俗音楽学会の会報に寄せられた例では、音楽の授業に三味線を取り入れている東京の都立高校の場合ですが、学区域の各家庭で眠っている三味線を譲り受け、百挺を揃えて毎年三百名の生徒が学んでいます。生徒たちも三味線に親しんでいる環境の中で育まれてきたので違和感なく学習しているようです。十二年間の指導のうち、第一段階が三味線、第二段階が唄入り三味線、第三段階で四拍子揃った長唄が完成。教師自ら五線譜によるスコアを考察して指導し、今では平行して民謡も取り入れ、二年次には「安来節」を暗譜で演奏できるまでになっているようです。

◎現状と問題点

毎夏全国高校総合文化祭が各地を巡回して開かれていますが、この文化祭の基本調査によると、日本音楽専門部門の加盟校が三七都道府県中九二一校、生徒数一万五千人、郷土芸能専門部加盟校は同じく一七七校、生徒数千六百十一人。日本音楽部門では箏曲中心で雅楽、能楽、人形浄瑠璃、三曲、地唄、長唄などの参加校が少ないそうです。また両部門とも参加校の多くがその指導者を地域社会の師匠たちに頼っているのが現状のようです。ここに揚げた数字は多いとも少ないとも取れますが、教員養成課程でこれまではほとんど日本音楽の指導法や教材化の指導がなされてこなかったことを考えると喜ぶべきであり、今後さらに数字の増えるのを期待したいものです。

学校教育との連携にはいくつかの問題点があります。教師サイドでは、教師の移動による指導の断絶です。小・中学校での教師の一校での勤務年限は比較的短いので話題に上がるようになってきました。高校の場合移動は少ないのでその心配はないでしょうが、それでも前述の場合定年を迎え、日本音楽の導入を存続させるための後継者育成に三年間の勤務延長を余儀なくされたと聞きます。

生徒サイドでは、生徒たちに時間的余裕がなく、部活動に参加する生徒自体が減少傾向にあるということです。相模人形芝居の二団体ではこれに加えて浄瑠璃などの古典作品は生徒にとって馴染みが薄く、興味の対象になりにくいため選択

科目として郷土芸能などを取り上げても生徒が集まらない現状のようです。

下中座では興味をもたせようと年一回現代的な音楽や照明を用いた新作を上演するなどの努力をしているとのことです。

ちゃっきらこ保存会では学校での表彰のほかに、マスコミからの取材への弾力的な対応を心掛けています。それは、社会からの評価を具体的に感じられるような環境づくりのためで、子供たちを含めた地域の人たちにチャッキラコを郷土の誇りとして守っていこうとする意識が生まれ、結果として継承と発展の地盤づくりにつながっているようです。

現在問題なのは、歌い手の高齢化で、本来は踊り手の母親たちが歌うものなので、付き添っている母親たちを歌い手として育てていこうとしています。

先に紹介した三作神楽は七年ごとの式年祭に奉納されるものなので、積極的に学校の運動会、市の芸能フェスティバルなどで子供たちを舞わせて身につけさせる努力をしているそうです。難易度の高い長刀の技を披露した高校生の舞い手が卒業後に東京へ就職してしまうと指導者は晴れない顔をしていました。

◎対策として考えられること

保存会や後継者育成活動の人たちの懸命の努力や悩みを聞いて参加者からいくつかの提案がありました。

その一つは、小さい頃から地元の民俗芸能になじんでいれば、将来やってみようと考えるきっかけを持ち得るのではないか。愛好者だけを対象にするのではなく、高校生を初めとする観客層を育てることが後継者の問題を含めた裾野を拡げるという意味で取り組むべき課題ではないかというのです。

確かに小さい頃の体験は大事で、東京の獅子舞では教師の移動でクラブ活動は無くなってしまったが、クラブに属していた生徒が卒業後に保存会に入り、伝承者となった例があります。

また、神奈川県下の進学先の推薦枠に伝統芸能の継承条件を設けられないか、といった意見も出されました。興味が薄くても入部した生徒はその良さを認識してやめることがないということで、実際に徳島県に中学から高校への推薦の例があるとのことです。

ほかにも生涯学習として民俗芸能の講座をもっと増やして欲しい、地元の民俗芸能を各学校にアピールしてはどうか、教育の中に洋楽に互して日本の芸能も入れるように中央に提唱していくべきだなどの意見が出されました。

もう十年ほど前から民間のカルチャースクールなどで邦楽器の技能や祭囃子、里神楽といった民俗芸能の講座が各地で開かれています。少人数制ですが結構人気があるように聞いています。横浜市でもこの秋から笛の講座を開設する予定で篠笛の技能を身につけてもらい、個人で楽しむなり、地元の民俗芸能に加わって活躍するなど余暇の活動の場づくりを意図しているようです。ただ、どこでどのような講座が開設されているかという情報がさらにキャッチしやすくなるとよいと思います。

◎民俗芸能継承の三つの留意点

地域に根ざした条件の中で生まれてきた民俗芸能を学校へ移した時には本来のものから変質せざるを得ないという意見が出され、安易な提携の危険性が指摘されました。

民俗芸能は地域と密着して現在まで伝えられてきました。同じ芸能が同時期に伝えられても、その土地によってなじむ部分、捨てられる部分、新たに加えられる部分があります。芸能の骨組みになる部分を変えてしまったら、それは崩れたということになりますが、肉付けの部分に地域の特徴が加味され得るということです。県央に伝わる「ささら踊り」もまったく同じではありません。踊りの数も違います。

埼玉県立民俗文化センターは民俗芸能や民俗工芸の公開や講習会活動が盛んです。年に五、六回秩父屋台囃子の名人を講師に招いて一般県民を対象に講習会を開き、ここで養成された人たちが「民文センター囃子」を結成して秩父のフェスティバルに出演するようになりました。いくら名人の指導を受けても「秩父屋台囃子」と名乗らないのは秩父ではなく、広く県内からの集合体であるからです。秩父の聞き手も耳が肥えているので、批判に晒されかねないのです。

第二に、民俗芸能はその歴史の中で時代に合わせて変化しながら現代に受け継がれてきたことです。

その変化は意識しない内からの場合と外からの変化があります。意識しない内からの変化ではチャッキラコのうたを例に挙げましょう。

二十年以上前の録音と今年のとを比べてみると、古い音では節（ふし）のうたいまわしが清らかで曲線的でしたが、新しいうたい方は直線的です。それは何に起因するかというと、以前は生活の中にうたがありました。仕事をしながら退屈を紛らわすために、大勢の気持ちを一つにまとめ

るために、新年や祝いの宴で。そのうたい方は自然体であったので節が自ずとよく回ったのでしょう。最近のカラオケブームの中でうたは声を張り上げるようになりました。するとコロコロと軽やかに節を回すことは出来なくなっているのです。「年配の人みたいにはうたえないヨー」と若いうたい手は話していました。

一見古めかしく感じられる民俗芸能が今日まで受け継がれてきたのはどこかに現代にも通じる新しい部分を持ち合わせているからではないかと感じることがあります。

例えば浜松近辺に数多く伝わる盆の芸能「遠州大念仏」は三方ケ原の合戦供養から始まったといわれるもので、双盤の轟く響きの中、踊り手が手に持つ胴長の締太鼓を打ちながら踊る賑やかな芸能ですが、その打楽器類の醸し出す雰囲気は、ライブハウスの雰囲気と似ています。

最近人気の県内の祭囃子も、周囲の批判をかわしつつ玉打ちや笛の節づくりに自分の技を披露できる柔軟性が魅力で盛んなのでしょう。

民俗芸能の奥に潜む新しさを見付けてそこに現代性を加える。これが民俗芸能の発展なのだと思います。

ニュース・伝言板

協会事業報告

○平成8年度理事会及び総会の開催

平成8年6月7日（金）県立歴史博物館において、本年度理事会及び総会が開催され、7年度事業報告・決算報告が承認されました。併せて8年度事業計画案、予算案が可決されました。

総会終了後、博物館の御厚意で学芸員の解説を受けながら展示の見学をすることができました。

○平成8年度民俗芸能見学会概要報告

平成8年度は、見学会が例年よりも多く5回実施されました。実施順に報告します。

第1回見学会《行合祭（逗子・葉山）》

日時　平成8年9月14日（土）

場所　葉山町一色海岸、森山神社

33年に一度行われる「行合祭」が催行され、葉山の一色海岸や森山神社で、逗子の一行を迎えての葉山との合同の祭礼を見学。

小雨のぱらつくあいにくの天気でしたが、県文化財保護審議委員の田中宣一先生、三浦高校の永田泰祐先生の行合祭にまつわるお話を聴き、葉山町の御厚意でしおさい博物館も見学できました。

参加者44名

第2回見学会《お峯入り》

日時　平成8年10月13日（日）

場所　JR山北駅付近及び山北町共和地区神明社

3年振りに行われる「お峯入り」を見学。午前中にJR山北駅隣接の広場での公開公演、午後に神明社まで登っての奉納が行われました。昼の移動に手間取ってお峯入り保存会会長や山北町民俗芸能保存会会長のお話をうまく聴くことができず残念でしたが、天候に恵まれ昭和56年以来神明社まで登っての奉納が実現し、お峯入りを堪能できました。山北町には移動車両の手配など、お世話になりました。

参加者30名

第3回見学会

《民俗芸能北から南から　第46回全国民俗芸能大会》

日時　平成8年11月23日（土）

場所　日本青年館（神宮外苑）

恒例の全国民俗芸能大会を見学。出演芸能は「八木山番楽」「岩倉の念仏踊り」「朝倉の俄獅子」「エイサー」。昼から夕方まで4芸能を解説付きでたっぷり鑑賞しました。夜は「八木山番楽」の研究公演が行われ、引き続き鑑賞をした人も…。

参加者31名

第4回見学会及び後継者育成事業《チャッキラコ》

日時　平成9年1月15日（水）

場所　海南神社（三浦市三崎）

小正月の行事「チャッキラコ」を見学。保存会事務局長（三浦市社会教育課長）の解説の後、少女たちがかわいい踊りを披露してくれました。

「チャッキラコ」見学後、海南神社の御厚意で社務所を拝借し、後継者育成事業として「民俗芸能の継承と発展―後継者育成と学校教育」のテーマで懇談会を開催（13頁参照）。貴重な意見交換が行われました。三浦市には見学や懇談会の手配でお世話になりました。

参加者34名

第5回見学会

《『川崎山王祭りの宮座式』特別公開試写会》

日時　平成9年3月23日（日）

場所　川崎市市民ミュージアム

川崎市教育委員会により制作された映像記録『川崎山王祭りの宮座式』の試写会を見学。川崎市文化財審議会委員でも

ある当協会後藤会長の解説の後、上映。

試写会に先立ち、川崎市の御厚意で会場の川崎市市民ミュージアムの展示も解説を受けながら見学できました。

参加者28名

○共催・後援事業

第二十回相模ささら踊り大会（共催）

日時　平成8年7月25日（木）

場所　海老名運動公園総合体育館

午後1時30分～3時45分

概要　初めに歓迎の意を表して海老名市の大黒舞、ささら踊りが披露され、続いて秦野・綾瀬・葛原・愛甲・遠藤・南足柄・長谷・海老名の順に踊りを発表しました。中入りには大谷はやし保存会が出演し、最後は合同で「神奈川おどり」「ドリーミングガール」を踊り、交流を深めました。

第二十四回相模人形芝居大会（後援）

日時　平成8年11月17日（日）

場所　厚木市文化会館小ホール

正午～午後3時30分

概要　5座が一同に会して伝統の相模人形芝居を披露。客席はほぼ満員で、観客は各座の熱演を堪能しました。演目は次のとおり。

『菅原伝授手習鑑』寺子屋之段（林座）、『傾城阿波の鳴門』巡礼唄之段（足柄座）、『増補生写朝顔話』宿屋より大井川まで（前鳥座）、『伽羅先代萩』政岡忠義之段（下中座）、『壺坂霊験記』山之段（長谷座）

相模人形芝居　下中座

文化財指定40周年
後継者育成5周年　一一記念自主公演
（時代・世話屋体更新披露）　**（後援）**

期日　平成9年2月16日（日）

会場　小田原市中央公民館ホール

概要　立派な屋体の披露をかねて日ごろの精進の成果を座員が披露、満員の客席から暖かい拍手が送られました。幕間に関係者のあいさつを挟みながら上映されたのは次の4演目。

『序三番叟』（県立二宮高等学校相模人形部）、『伽羅先代萩』政岡忠義の段、『傾城阿波の鳴門』巡礼唄の段、『絵本太功記』十段目（尼ヶ崎の段）。

座長から「各方面の御支援により、盛会裡にて終了することができました。」とのコメントが寄せられています。

会員活動紹介

○田村ばやし保存会

田村ばやし　文化財指定20周年記念行事及び記念誌刊行（報告）

日時　平成8年11月10日（日）

場所　平塚市立神田小学校体育館

概要　記念行事では、関係者のあいさつや祝辞の後、田村ばやしの採譜でお世話になった作曲家の溝部國光さんの講演が行われ、百人余りの参加者を得て盛会のうちに終了しました。

なお、記念誌については、余部がありますので御希望の方は御連絡ください。

連絡先　〒254平塚市田村六二八三

電話　〇四六三（五五）五〇六五

会長　亀井秀雄まで

また、田村ばやしの採譜については『平塚市文化財調査報告書第28集』に「田村ばやし採譜調査報告」として収録されています。こちらも余部がありますので御希望の方は御連絡ください。

連絡先　〒254平塚市豊原町2―21

電話　〇四六三（二三）一二一（代）

（内）五二八

平塚市教育委員会社会教育課

文化財保護係まで

○綾瀬市民俗芸能保存協会

15周年を迎えて（報告）

昭和56年秋、はやし・みこし・古謡・踊りの各団体で協会を設立。以来、普及に後継者育成にと努力してきましたが、全団体による発表会を開いたことがありませんでした。15周年記念としてそれが実現し、この2月に盛大に行うことができました。会場は熱気にあふれ、お互いに大いに刺激となったようでした。民俗芸能はふるさとそのものです。末永く伝えていこうという思いを新たにしている今日この頃です。

○あつぎひがし座

第23回　人形芝居自主公演（予定）

日時　平成9年6月15日（日）

午後1時30分開演

会場　厚木市文化会館小ホール

概要　県立厚木東高校「人形浄瑠璃部」OBによる自主公演で、日頃の練習成果を発表し、伝統芸能の良さを御理解いただき、幅広い年代の方に楽しんでいただくものです。演目は、『三番叟』、『伽羅先代萩』御殿の段より政岡忠義の段、『増補大江山』戻り橋。

○茅ヶ崎海岸浜降祭保存会

浜降祭の日程変更（報告）

茅ヶ崎海岸浜降祭の開催が、平成9年より7月15日から7月20日に変更になりました。

保存会では、以前から氏子の職業の変化や後継者育成などの観点から日取りを改める検討を重ねていたとのことです。

○小田原ちょうちん踊保存会

国体のイベントに参加します（予定）

平成10年10月に開催される第53回かながわゆめ国体小田原会場のオープニングイベントとして、同市国体実行委員会より出演を依頼され現在目標に向けて小田原ちょうちん踊りの練習に励んでいます。

月2回中央公民館において、踊りの指導をしております。

市民の方々で参加したい方は事務局までお申し込みください。

事務局　小田原市荻窪四八七
小田原ちょうちん踊保存会
電話　〇四六五（三四）五七九八

○川崎沖縄芸能研究会

御招待します

六〇回芸能公演（予定）

日時　平成9年10月19日（日）

場所　川崎市立教育文化会館

神奈川県の指定文化財。沖縄民俗芸能公演は、今回で60回目を迎えます。関係者の皆様には無料招待券を準備しますのでご連絡下さい。

連絡先　〒210川崎市川崎区浅田3―8―11
電話　〇四四（三二二）二三四〇
川崎沖縄芸能研究会
会長　仲宗根忠治

○二宮町民俗芸能保存協会連絡協議会

第23回二宮町民俗芸能のつどい（予定）

日時　平成9年10月26日（日）

場所　二宮小学校体育館

演目は次のとおり。

木遣り・祭ばやし（大山ばやし）・鎌倉ばやし・獅子舞・古謡（盆踊り唄）・民謡踊り・招待芸能（二宮高校相模人形芝居）

○祭囃子保存会若音会

――座間市栗原

平成8年度（報告）

主として後継者の育成のために毎週金曜日、小中学生を対象に祭りばやしの指導をする。期間は5月から10月まで。他に夏祭り・秋祭り・地域の行事のイベントに数多く出演する。

平成9年度（予定）

7月龍蔵神社夏祭り出演予定
8月座間キャンプ　日米合同盆踊り大会に出演予定
9月栗原神社秋祭りに出演予定
10月地域の行事イベントに出演予定
11月市民ふる里まつり出演予定

○第21回相模ささら踊り大会（予定）

日時　平成9年7月18日（金）

場所　厚木市荻野運動公園体育館（メインアリーナ）

午後2時～4時

○第25回相模人形芝居大会

日時　平成10年3月15日（日）

場所　厚木市文化会館　小ホール

正午～午後3時30分

お知らせ

○国際民俗芸能フェスティバル・第38回関東ブロック民俗芸能大会概要

日時　平成8年10月19日（土）20日（日）

場所　新潟県柏崎市

概要　平成8年度から海外の団体も参加して行われました。前日には海外参加団体を含めシンポジウムが開かれ、国際民俗芸能フェスティバルの名にふさわしい充実した大会となりました。演目は次のとおり。

来宮神社鹿島踊（静岡県熱海市）、雪祭（長野県阿南町）、逆面の獅子舞（栃木県河内町）、野田十二神楽（山梨県大和村）、東金砂神社田楽舞（茨城県水府村）、下中野御神楽舞（新潟県吉田町）、綾子舞（新潟県柏崎市）、中国ヤオ族の仮面舞踊（中華人民共和国）、大韓民国の仮面劇（大韓民国）、モンゴルの仮面舞踊（モンゴル国）

○国際民俗芸能フェスティバル・第39回関東ブロック民俗芸能大会予定

日時　平成9年10月25日（土）26日（日）
場所　長野県長野市（県民文化会館）
概要　平成9年度は前回と同じく海外から2団体を迎えて「稲作（農耕）儀礼の芸能」をテーマに開催されます。神奈川県からは横須賀市の指定を受けている「鴨居とっぴきぴー踊り保存会」が参加し、五穀豊穣・大漁などの祈りを込めた「獅子舞」「鯛つり」等を披露していただく予定です。

また、次のブロックでも日時、場所が決まりました。

【近畿・東海・北陸ブロック】
日時　平成9年10月11日（土）12日（日）
場所　愛知県犬山市（犬山市民文化会館ホール）

【中国・四国ブロック】
日時　平成9年10月18日（土）19日（日）
場所　島根県江津市（江津市総合市民センター）

○川崎市立日本民家園開園30周年記念行事に記念講座と民俗芸能公演（予定）

平成9年度に開園30周年を迎え、記念講座や国指定重要有形民俗文化財「旧船越の舞台」、民家を活用しての民俗芸能の公演等を企画しています。予定は次のとおり、

▼記念講座「芸能と農村舞台」
平成9年9月6日（土）・13日（土）・20日（土）・27日（土）・10月12日（日）の全5回

昭和女子大から当協会の後藤淑会長、大谷津早苗氏を講師に迎え、民俗芸能史の講演を予定。定員40名、受講料三千五百円、締め切りは8月26日。詳細は日本民家園へお問い合わせください。

▼民俗芸能公演
・農村歌舞伎（旧船越の舞台）
海老名市の大谷芸能保存会、座間市の座間歌舞伎
平成9年10月4日（土）
＊雨天時は5日（日）
・相模人形芝居　下中座
平成9年10月12日（日）
※民家を利用します。
・川崎市内の民俗芸能公演（旧船越の舞台）
平成9年11月3日（祝日）
＊雨天時は9日（日）

問い合わせ先
川崎市立日本民家園
〒214 川崎市多摩区枡形7―1―1
電話　〇四四（九二二）二一八一

おめでとうございます。

・神奈川文化賞受賞
「ちゃっきらこ保存会」

・県民功労者表彰
「お峯入り保存会」

協会の団体会員の「ちゃっきらこ保存会」と「お峯入り保存会」が、長年の民俗芸能の継承と発展に尽くしてきた功績を認められ、それぞれ平成8年度の表彰を受けました。

誠におめでとうございます。これを契機として、地域の伝統文化の発展のためますます御活躍されますようお祈りいたします。

原稿を募集しています！

編集部では会員の方々からの投稿をお待ちしています。日ごろの活動状況、行事の写真、また情報交換の場として御活用くださるなど、お気軽にお寄せください。

御意見・御感想をお寄せください！

編集部では読者からの御意見・御感想をお待ちしています。機関紙に限らず、協会や協会の事業のことについてもお気軽にお寄せいただければ幸いです。

あて先は、事務局まで。奥付を参照ください。

新規会員募集

民俗芸能を実際に行っている人、また民俗芸能に興味をお持ちの人等、協会では多くの方々の入会をお待ちしております。会員の皆様も勧誘に御協力ください。協会では事業として、各種芸能見学会、会報の発行等を予定しております。

入会御希望の方は、氏名、住所、職業、電話番号を明記のうえ、事務局にお申し込みください。なお、会費は個人会員は年額一口千五百円、団体会員は三千円となっております。

会費の納入について

当協会の事業の円滑な運営のためには、会員の皆様の会費納入についての御協力が是非とも必要です。6月の総会までに納入くださいますようよろしくお願いいたします。

訂正

「かながわの民俗芸能」第60号の9頁4段6行目及び10頁1段2行目の「扇祭り」は「王祇祭り」の誤りでした。お詫びのうえ訂正いたします。

編集後記

見学会の記録を作成していて、この町の教育委員会の担当者にお世話になった、あの保存会の方にもお世話になったと、思い返してみるといろいろな場面でいろいろな方々に助けていただいている。そのどれか一つが欠けても協会の事業は成り立っていかないものだと思った。

世の中は助け合って成り立っているとことばでも聞き、またそうも思っているが、それを肌で実感できたのがこの1年であり、私にとっての収穫でもあった。引き受ければ負担にになることを快く引け受けてくださった感激は深く心に刻まれている。

しかし、省みると志の輸入超過。お世話になった方々にどのように返していくか、これからの課題である。

（事務局　樋口）

「かながわの民俗芸能」第61号

平成9年3月31日発行

編集　横浜市中区日本大通33
神奈川県教育庁生涯学習部
文化財保護課内
神奈川県民俗芸能保存協会
事務局　電話〇四五（二〇一）一一一一（代）
内線七三三七

発行　神奈川県民俗芸能保存協会

印刷　株式会社港栄印刷
電話〇四五（三三三三）八八一五（代）